

～幼保小の子どもの学びと育ちをつなぐ～

架け橋通信



令和5年度 第4号
(令和6年2月発行)

京都市教育委員会 学校指導課
幼保小の架け橋プログラム担当

TEL:075-222-3746

今こそ聞きたい! 「非認知能力」を育む、乳幼児・小学生の子育て講座

『どうする?子どものはじめての100か月』～未来を創造的に生きる子どもを育むには～

1月20日(土)に京都教育大学教授 古賀松香先生にご講演いただきました。妊娠期の10か月+幼児期+小学校1年生の途中あたりまでを指す「はじめての100か月」は、人格形成の基盤となる重要な時期であると言われており、こども家庭庁は、昨年12月に「はじめての100か月の育ちビジョン」を公表しています。

「非認知能力」は、積極性や粘り強さ、共感性や自制心、コミュニケーション力など、さまざまな側面を有しており、個人の人生に大きく関係する力。乳幼児期・学童期に様々な「遊び」や「人とのかわり」を通して育まれます。非認知能力は、認知能力(読む、書くなどの知識や学力)の獲得にも大きく影響します。



オンライン配信も含め参加者は130名。その76%が保護者、12%が教育関係者で、多くの保護者の皆様が、「子どもの発達にふさわしい子育ての情報」を得たいと思っておられることがうかがえました。【講演の主な内容】

●「アタッチメント」と「遊び」

安定した「アタッチメント」は、その後の子どもの非認知能力や仲間関係のよさと関連する。乳幼児期の「遊び」は生活の中心、子どもの「遊び」は「学び」であり、遊びを通して非認知能力も育っていく。ただし、興味や関心に基づいた自発的な遊びが大切。子育ては一人で行うものではなく、身近な専門家(保育者)を頼ってほしい。貴重な子育ての時期を楽しもう。

●質の高い幼児教育と非認知能力

予測不可能な社会において、仲間と共に協働し新しい考えを生み出しながら生き抜くためには、乳幼児期の情緒の安定(非認知能力の育ち)を基盤として、認知能力を高めしていくことが重要である。非認知能力はさまざまな側面があるからこそ、遊びという総合的な活動を中心とした質の高い幼児教育を行う園所と一緒に非認知能力を育てていくことが重要。

●幼児教育の質と子どもの発達

今注目されているのは、保育者と子どもや仲間同士の相互作用、主体的な遊びと保育者の適切な援助等の幼児教育の「プロセスの質」。乳幼児期の子どもの学びには、温かく繊細な保育者とのやり取りと、幼児期にふさわしい体験を豊かにする教材の提供が必要。それが、子どもの育ちの質を保障する質の高い幼児教育の基盤。その中で子どもの主体的な物事への関わりがどれだけ引き出されているかが、園所選びの重要な視点。

講演後のアンケートからは、「非認知能力は、特に乳幼児期に育める大切なものと知った」「一人で子育てするのではなく、幼稚園や保育園等の保育者などの専門家と共に育てていくと聞いて安心した」などのご意見がありました。なお、本講座は3月1日(金)より動画配信する予定です。右の二次元コードよりご覧ください。次回の子育て講座は、6月29日(土)開催です。詳しくは、5月頃に京都市教育委員会やこどもみらい館のホームページでご案内する予定です。



れっつ ちゃれんじ!!

今からはじめる 架け橋プログラム!!

もうすぐ3月! 架け橋プログラムの取組を、学校全体で考えてみましょう。

○幼保と一緒に来年度の幼保小連携・接続の取組の年間計画の作成を!

互いの授業・保育参観やその後の協議、子ども同士の交流、合同研修会などの年間計画を、幼保小で一緒に調整しながら立案しましょう。実施時期や内容の見通しをもちやすく、学校全体で取組の共有化が進みます。

○スタートカリキュラムの実践を!～スタンダードの改訂と各教科にスタートカリキュラムの視点が入ります～

スタートカリキュラムの手引きには就学前施設で経験した活動(幼児期の終わりまでに育ってほしい姿)も掲載しています。それらを活かし、複数の教科の目標や内容を組み合わせたり、各教科の指導内容を関連させたり、合科的・関連的に1年生が主体的に学んでいきやすい授業作りを進めましょう!

○研究ブロックの今年度の報告動画をポータルサイトに掲載予定!

3つの研究ブロックの取組報告を視聴いただき、各校での次年度の取組に活かしてください。

幼保小架け橋プログラム 第2回情報交換会より

1月24日に第2回情報交換会を開催。御所南、下京雅ブロックから実践を発表。その後グループ協議。

【幼児教育の考えを取り入れた半日入学】

椅子や机をなくし、慣れ親しんだ環境の遊び等のコーナーを設置。学校は楽しい!と思えるように。初めての先生にも何でも話せる安心感を。



【5歳児との交流活動を含めた生活科“もうすぐ2年生”】

生活科めあて：安心して入学してもらえるために、1年生として何ができるか？

幼稚園の5歳児が

小学校生活の疑問

や不安を話す動画

を見て、自分たちは何ができるかを

考え、交流時のコーナーづくりをする。



・小学校が子どもや保護者の思いを受けとめてもらえていることを感じた。(保護者)

・安心させる方法を提案したらすぐに実現してもらい、心強い。我々も安心して送り出せる。(幼稚園教諭)

【新たな入学式の取組】

机や椅子をなくし、遊べる

環境を幼稚園の先生と設定



1年生教室

入学式



①受付で教科書等配布物を保護者に渡し、保護者は入学式へ
新入生は教室で遊び、トイレを済ませてから入学式へ

②保護者は式場に残り、学校や担任の連絡事項の話を書く。

新入生は教室で遊び、先生の話を書き、先生と記念写真を撮る。

③保護者が教室に子どもを迎えに行き、下校する。



・きめ細かな関わりで気持ちの良い入学式を！ ・子どもが「明日も来たいな」と心を動かす一歩を！

《グループ協議より(実践校としての今までの取組や知りたいことについての情報交換)》

- ・これまでの小学校の当たり前にこだわることなく、今後の半日入学、入学式に反映できるよう職員会議で提案したい。
- ・自校と幼稚園等で子どもたちに育てたいものが同じとわかり、つながって一貫して育てる研究ができるのが架け橋の意義。
- ・授業・保育公開をしているが、環境構成の目的と、どのような資質・能力の達成につながるのかなど、事後研修で確認することが大事であると思った。
- ・5歳児と1年生の交流では5歳児がお客さんでなく、一緒につくる、遊ぶというスタンスで。その土台はそれまでの関係性。

《アンケートより》

- ・小学校の視点からの連携への考え方、思い、方法を知った。・話し合えば分かり合えることがわかった。・就学前施設の先生と繋がりを持ち、一緒に考えていく必要性や可能性を感じた。・学校事情が様々な中で取組が考えられていることがわかった。・スタートカリキュラムの実践例を知りたい。・遊びを取り入れての教科の学習の進め方を知りたい。

コラム

なかにしサミの 幼分補給

「だいたいすいっぱいじよのもり」の授業

十一月に1年生の生活科の授業を参観しました。研究に取り組んでいただいたいすいっぱいじよのもりの授業では、子どもの「主体性」が発揮できるような環境構成や先生の言葉かけ(保育でも重要な要素)の中で、子どもが安心して主体的に活動している様子をよく見かける様になりました。この日も机を移動し、広い空間を設定した上で、子どもたちがやりたいと思っているドングリや葉っぱを使った遊びのコーナーを作れるように先生が意図した自然物や材料が用意されていました。その中で子どもたちは言葉を交わしながら、秋の自然物に触れたり、その特性を感じながら飾りやおもちを作ったりと生き生きと活動する姿が見られました。先生は、それぞれの活動に肯定的な言葉かけをされつつも、子どもの行動や言葉を記録されその後の授業の組み立てを考慮しておられました。保育や授業の改善は「架け橋プログラム」の大きな目的の一つです。



中西 昌子(なかにし しょうこ)

京都市教育委員会 学校指導課 参与
市立小学校教諭、幼稚園教諭・教頭、
竹田幼稚園長、市教委首席指導主事
を経て、平成三十年度から現職。